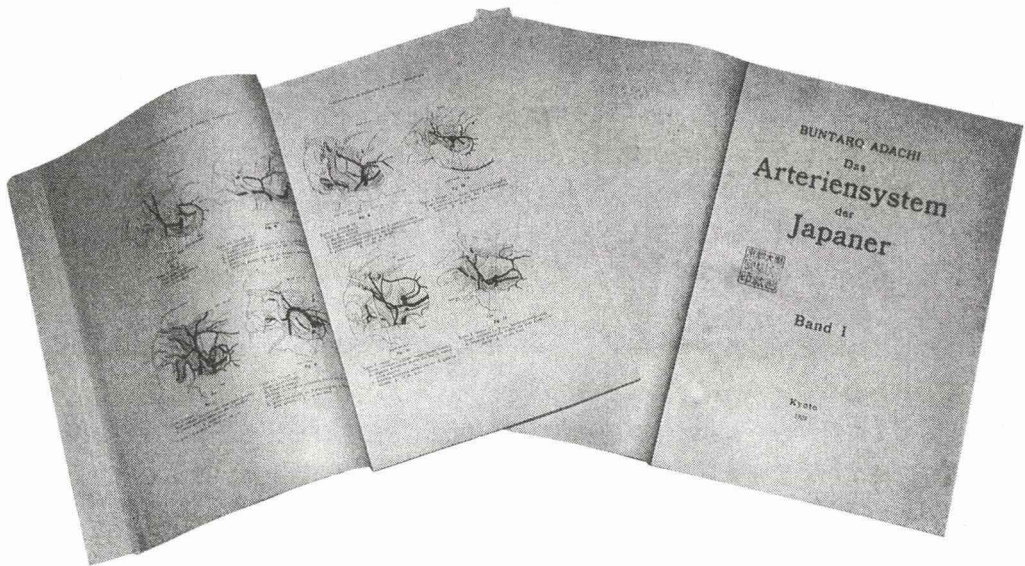


京大広報

No. 410

京都大学広報委員会



京都帝国大学医科大学解剖学第二講座初代教授足立文太郎博士著『日本人の動脈系統』
 (Das Arteriensystem der Japaner) 一関連記事本文104ページ

目 次

学部入学式における総長のことば……………	104	日 誌……………	113
大学院入学式における総長のことば……………	108	<紹介>	
<大学の動き>		放射性同位元素総合センター……………	114
総合技術部の設置……………	112	討 報……………	115
部局長の交替等……………	113	<資料>	
授業料の納付方法について……………	113	平成3年度入学試験諸統計……………	116
<栄誉>		<随想>	
柳田聖山名誉教授, 山田秀明農学部教授が		老人の戯言	
紫綬褒章を受賞……………	113	名誉教授 上山 安敏……………	120

学部入学式における総長のことば

平成3年4月11日

総 長 西 島 安 則

諸君、入学おめでとう。

本日、ここに、元総長 奥田 東 先生（第17代）、元総長 岡本道雄 先生（第19代）、前総長 沢田敏男 先生（第20代）、そして、渡辺庸一郎先生、田中周友先生、小堀 憲先生、久米直之先生はじめ、多数の名誉教授の先生方においていただき、部局長の先生方、教職員の皆様と共に、平成3年度の学部入学式を挙行し、諸君を迎えますことは、京都大学の最も大きな喜びであります。

この春は、文学部242名、教育学部75名、法学部415名、経済学部282名、理学部326名、医学部102名、薬学部87名、工学部1,069名、農学部338名、合計2,936名の新入学生と、34名の第3学年編入学生及び3名の再入学生、総計2,973名の諸君を迎えることができました。諸君は京都大学で学ぶことを志して、努力を重ね、力強く難関を越えて、晴れて京都大学生となりました。本学の学風を継ぐ頼もしい担い手として、全学を挙げて、諸君を心から歓迎します。入学式の主役は言うまでもなく、入学生諸君であります。この日この時に諸君の心の中にしっかりとした始発の意志を刻み込んで下さい。

今朝、この喜びの時に、これまでの年月、諸君の成長の一日一日を、勉学の一年一年を見守り、励まし、支えて下さったご家族の皆様、諸君を教え導き、そして人生の意義を自覚して進む力を与えて下さった先生方、楽しく語り合い、共に学び励まし合い、共に生きる喜びを分かち合うことの出来た友人達、そして、かげにひなたに諸君を見守って下さった多くの方々に、諸君と共に、改めて感謝したいと思います。

京の春、桜は東山のふもとから北山のすそをまわり、そして西山のあたりまで、この都をめぐり、春の雨は若々しい木々の芽に生気の輝きを与えています。

8世紀の末、延暦13年（794）にこの地に都が定められて以来、都の宿命としてここは調和よりもむしろ相剋の地でありました。1200年の時代の重層は、ここに独特の多様性を定着させました。新しい時代の思潮は伝統と対峙しつつ成熟し、古い伝統は新しい風潮の中でさらに洗練され、そのようにして、一つにまとまるのを不断に打破しつづけて、次の時代への創造がなされて来ました。そんな風土の中に、京都大学が生まれ、そして学風が培われました。京都大学が自由な学風を大切にし、学問における獨創性を強調するのもそんなところに根源があると私は思います。

今日は、この京都大学の創立から間もない頃、解剖学者、人類学者として、学問の発展に貢献された足立文太郎先生（1865～1945）のことを話しましょう。このような先達一人ひとりの学問への対し方、生き方が、織りなされて今日の本学の学風が形成されてきました。

足立文太郎先生は、慶応元年（1865）6月15日静岡県伊豆の国田方郡上狩野村に生まれ、韭山小学校、韭山尋常中学校そして駿河の国の沼津尋常中学校で学びました。明治15年（1882）の春、17歳の時東京へ出て、独逸学校、東京外国語学校、東京大学予備門を経て、明治22年（1889）に帝国大学〔明治

19年（1886）に東京大学を帝国大学と改称し、医科大学に入学しました。明治27年（1894）に医科大学を卒業して母校の解剖学の助手になりました。そして、明治31年（1898）に第三高等学校の教授となり岡山医学校に勤務しました。

明治28年（1895）になって、日清戦争（1894～1895）の終結とともに、かねてから懸案であった京都帝国大学を創設する計画が具体的に検討されることとなり、当時の文部大臣 西園寺公望（1849～1940）は創設委員を任命し、「京都帝国大学創立計画＝関スル諸案」が審議されました。こうして、政治の中枢から離れたこの学都で自由な学問の研究を盛んにする事を意図して、法科大学、文科大学、理工科大学、医科大学の4分科大学と大学院からなる総合大学を京都に創設する予算案が作成され、翌明治29年（1896）春に議会を通過しました。明治30年（1897）に京都帝国大学は創設され、その年の9月に、最初に理工科大学が開講されることとなりました。9月13日には本学の最初の入学式が挙行されましたが、そのときの新生学生は53人でした。2年後、明治32年（1899）に法科大学と医科大学が開設され、日露戦争（1904～1905）の終結後、明治39年（1906）になって、文科大学が開設され、最初に構想された総合大学の形が整いました。

足立文太郎先生は、本学の医科大学創設に当たり、その最初の教授陣の候補者の一人として、明治32年（1899）にドイツへ留学を命じられました。そして、シュトラスブルク（Strassburg）大学のシュワルベ教授（Gustav Schwalbe）の指導を受けることになりました。

ひとりの学者がその全生涯をかけた研究の起点を、若いときの論文の中に明確に見ることができるのです。足立文太郎先生は、留学される前明治29年（1896）に、『本邦人脈管調査 第一報 上肢動脈の研究』を発表しておられますが、そこには、烈々たる気魄をこめて、次のように述べておられます。

「そもそも外貌及び骨格については、人類学之を論ずること久しく、かつ極めて周到なり。而して、筋、脈管、神経等についてもその調査は一様に久しく、かつ周到なりといえども、これを人類学上に論ぜんとするに至りては、実にその冷淡に驚くなり。」

さらに、

「……されば素人は暫く之を措き、解剖学者すら“肉眼解剖学は今日殆ど完成したり。”などと言うは人類学上に毫も之が思慮を下さざるものにして、その見解の極めて狭きものと言うべし……。」

そして、

「これ余が日本人解剖学に向かって歩を進めんと企てたる所以のものなり。然りと雖も、その事業たるや蓋し甚大にして、なお多くの学者の終生を之が犠牲に供するに足るべきものなりとす。」

と、結んでおられます。

足立文太郎先生が、この初期の論文を発表されて、約50年後、昭和18年（1943）に「ゲーテ賞」（第1回）を受賞されたときの受賞講演で、生涯を貫かれた研究の軌跡を顧みて、その出発点を次のように述べておられます。

「従来、人類学と言え、皮膚の色、毛の性質、顔の形等外観上のことか、然らざれば骨格のことのみである。しかし私は考えた。外観上または骨格に人種の違いがある以上は、これに包まれ、またこれに付着する筋、従って、これに分布する血管および神経、また内臓等すべての軟部も違わねばならぬ。よって＜軟部人類学＞というものを新たに設くべきである。

この考えよりしては、自然また次のことが浮かみ出る。即ち、今日の人体解剖学は、実は人類一般の解剖学ではなくして、ヨーロッパ人を材料とした解剖学である。軟部人類学の立場よりしてこれ

を視るときは〈ヨーロッパ人解剖学〉である。……日本の解剖学者は、まず〈日本人解剖学〉を編まねばならぬ。

以上〈軟部人類学〉、〈日本人解剖学〉、これがそもそも私が解剖学に身を委ねた動機であり、またその研究の出発点であります。」

そして、

「ヨーロッパの解剖学は、今日でも軟部人類学の立場から見ると頗る滑稽のことがあります。ドイツ人の骨にフランス人の筋肉をつけ、イタリア人の血管あるいは神経を分布させるということになっております。まるで化物の解剖であります。……これを解らせるには、根本的に解剖をやり直さなくてはなりません。」

とお話しになっておられます。

こうして、先生は「軟部人類学」(Anthropologie der Weichteile)の創始を決意されたのであります。

ドイツへは最初3年の予定で留学されたのですが、先生はそれからさらに2年間、その自分の決心した新しい解剖学人類学の研究のためにヨーロッパ中の博物館や大学医学部をまわっているいろいろな資料を収集し、さらに研鑽を積み、5年たって明治37年(1904)に帰国され、京都帝国大学医科大学の教授に就任、解剖学教室の第2講座を初代教授として担任されました。

先生は、また、文科大学〔分科大学は大正8年(1919)に学部と改称〕で明治42年(1909)から、人類学の講義も始められました。これは、わが国での体質人類学の嚆矢とも言うべき講義でありました。

55歳を過ぎて医学部長になられるまで、先生は革靴は履かれず、いつも下駄か、ゴム靴でした。煙草は豆きせるできざみを吸っておられました。吉田の家から学校へ古びた洋服を着て、いつも愛用のズックの鞆をさげて、もう冬も近いというのに色あせた麦わら帽子を冠って、朝は早く夜は遅く通われる姿を見て、神楽坂あたりの人は、まさか京大の医学部の大先生とは思ひもよらなかったという話も残っております。こうして20年以上の間こつこつと若いときに、自分が自分の使命と心に決めた仕事を進めてこられました。

こうして、足立文太郎先生は、まず、「日本人の動脈系統」の研究の完成に没頭しました。学会への出席の時間も惜しんで、文字通り全精力を研究に打込まれました。解剖学者、人類学者からさえも、先生の存在が忘れられていた程でした。大正14年(1925)に、先生は60歳の定年を迎え退官され、名誉教授になりましたが、研究の毎日は全く変わらずに続きました。毎日、解剖学教室の研究室に通い、学生達が解剖を学んでいる部屋と一緒に黙々と仕事を続けておられました。

先生の『日本人の動脈系統』(*Das Arteriensystem der Japaner*)が完成し出版されたのは、昭和2年(1927)でした。明治29年(1896)に、前に述べました第1報が発表されてより実に30年以上の間の懸命の研究の成果であります。ドイツ語で書かれた上下2巻からなる大版大部のこの著作は、諸外国のこの分野の学者に強烈な印象を与えました。現在でも、各国の大学医学部を訪問しますと、図書館のガラス戸棚の中に、この著者が大切に置かれているのを見ます。この気魄のこもった著書が出版されたときに、ヨーロッパの人類学者(Edward Loth)が「光は再び東洋より」と言って感嘆したと伝えられています。まさに、世界に気を吐く不滅の研究であるというべきでしょう。

動脈系統の研究を完成されましたとき、先生は62歳でした。そして、すぐに続いて静脈系及びリンパ系の研究を始められました。

昭和10年（1935）7月、日本解剖学会総会が新潟で開かれておりました。そこで、解剖学会の名において、足立文太郎先生の70歳のお祝いがありました。そのときの講演で先生は次のようなことを言っておられます。

「……御覧の通り、私も年をとりましたが、幸に健康であります。老いたる研究生として今日なお日々教室に通っております。自分としては老いたれども朽ちたるとは感ぜず、素より壮年時代とは異なり、万事遅々、仕事はとんとはかどりません。余命と申したところで今後何程やあるべきと覚悟は致しておりますが、せめて目下しかけている『日本人の静脈系統』だけは仕上げたいと思っております。がこれもどうやら覚束なくなりました。……」

率直なお心持、毅然たる学者的態度は、この短い言葉からも十分窺われます。そして、先生はそれを立派に仕上げられたのです。

『日本人の静脈系統』(*Das Venensystem der Japaner*)の第1巻は昭和8年（1933）に、そして、その第2巻は昭和15年（1940）に、それぞれ出版されました。『日本人の動脈系統』（1927）の出版後、さらに、13年間、絶えることのない学問への情熱と、ただひたすらな研鑽の成果であります。

太平洋戦争（1941～1945）の末期、昭和20年（1945）の4月1日に、足立文太郎先生は偉大な足跡を残して、80年の生涯をとじられました。

解剖学者 平澤 興先生（1900～1989）（第16代総長）は、次のように述べておられます。

「仰いでは蒼天の如く高く、接しては慈母の如く近いのは、わが足立文太郎博士である。……博士こそは日本医学が真に世界に誇り得る最も偉大な学者の一人であって、軟部人類学の創始者として、また日本人解剖学の提唱者として永久に医学史上に輝く巨星である。……」

真に偉大人々への最も香り高い業績を見て感ずることは、競争意識などがないということである。……真にあることに熱中し、愛情が持てるようになれば、競争などということはもはや有害無益である。」

学問をするという純粋な知的営為はよく山登りにたとえられます。一步一步を踏みしめて、最初に目ざした山の頂に達すると、急に視界がひらけて、今まで見えなかった山の彼方にさらに高い峰が眺望されるようになります。谷を渡り、急坂を登って、ついにその高い峰に立つと、さらに、より大きな展望の中に、次に目ざすべき嶺々の重疊が見渡せるようになります。それは、さらに大きな楽しみを与えてくれます。もう何も、急いだり、焦ったり、競争したりすることはないのです。自分の学問の展望を楽しみながら、内から湧き出る学問への情熱を力として、歩みつづけ、登って行くことによって、学問の楽しみはより深くより広くなってゆきます。

諸君は、中学校、高等学校の勉学学習の道程を経て、立派に競争を勝ち抜いて京都大学へ入学しました。人生において、競争意識が前進への推進力となる局面のあることを否定するものではありません。しかし、学問は競争ではありません。競争というのは、勝てばそれで、目的が達したのです。これから諸君がする学問は、何処までやってもきりのない学問です。勝ったといって自惚れ、自己満足は出来ないのです。これから諸君はこの学問の府で学問をするのです。これからはもう競争ではありません。そ

れは競争に勝つよりも、もっともっと厳しいかもしれません。しかしそこにある登る力、前へ進むエネルギーは、諸君一人ひとりの中にある美と知を楽しむ心、真理を探究する情熱にあります。

京都大学に入学した今日から始まる毎日が、諸君にとって、未知のことを知る喜び、そして、美しさをより深く味わうことの楽しみに満ちた日々でありますように切に望みます。学問はその水準が高ければ高いほど個性的であります。京都大学の学風は、そのような個性的な懸命の知的営為によって継承され発展して来ました。美と知を楽しむ心を持って、諸君のこれからの人生が真に充実したものとなりますことを心から期待します。

大学院入学式における総長のことば

平成3年4月11日

総 長 西 島 安 則

諸君、大学院研究科への入学おめでとうございます。

今日ここに、平成3年度の大学院入学式を挙行し、名誉教授 熊谷直一先生の御臨席をいただき、研究科長、部局長、教職員の皆さまと共に、諸君を迎えますことは、世界の中の学問の府 京都大学の最も大きな慶びであります。

本年度の入学・進学者として、修士課程へは、文学研究科75名、教育学研究科23名、法学研究科16名、経済学研究科18名、理学研究科186名、薬学研究科46名、工学研究科626名、農学研究科164名、合わせて1,154人の入学者を迎えました。博士後期課程へは、文学研究科58名、教育学研究科16名、法学研究科20名、経済学研究科16名、理学研究科139名、医学研究科127名、薬学研究科19名、工学研究科74名、農学研究科60名、合わせて529名の諸君が進学・入学しました。修士課程と博士後期課程を合わせて大学院への入学・進学者は1,683名です。

諸君の大学院への入学・進学は、諸君が学問の攻究を更に進めようとする意欲をもって、日夜たゆまぬ研鑽を積んでこられた賜物ですが、また、諸君が更にひたすら研究を続けることを理解し、それを支えて下さっている諸君の家族の皆さんをはじめ、多くの方々のご理解によるものです。ここに、諸君と共に改めて感謝の意を表わしたいと思います。

現在、本学の修士課程には約2,300名、博士後期課程には約1,800名、合わせて、約4,100名の諸君が在籍しております。この春には、1,060名の諸君に修士の学位の授与をいたしました。博士の学位授与は、ひと月おきに、奇数月に行っておりますが、昨年度、平成2年度は549名の諸君が博士の学位を取得されました。そのうち249名が課程博士で、300名が論文博士でした。

昭和28年(1953)に新制度による大学院研究科の課程が発足しまして以来40年近くになりました。この間、この春までに、京都大学大学院は、27,070名の諸君に修士の学位を、12,365名の諸君に博士の学位を、授与することができました。なお、旧制時代に本学で博士の学位を取得された方は9,651名でし

たので、本学は創立以来、総計22,016名の博士を輩出してきたことになります。本学の大学院の基盤は、各研究科における創造性ゆたかな活力に満ちた研究の成果と、これまでにこの大学院の課程を修了し学位を取得して、各方面、各分野で活躍しておられる先輩諸氏の示された顕著な貢献によって固まりました。そして、国際的なアカデミック・コミュニティにおいて自ずと高い評価が定まりました。

京都大学は、明治30年(1897)創立されました。間もなく、1997年には創立100周年を迎え、京都大学の第1世紀から第2世紀に入ります。ちょうどその時が新制になりまして50年、京都大学の第1世紀は、前半が京都帝国大学(1897~1947)、後半が京都大学(1948~1997)の各半世紀ということになります。京都大学の今日の学風は、この京都という土地の風土によるところがたいへん大きいと私は思っています。東京に次いで、京都帝国大学が創立されます時には“政治の中枢から離れた学都以、自由な学問・研究を盛んにする”という意図が強調されておりました。そして、その意図は立派に満たされて、自由な学問・研究を盛んにする学風がここで培われました。18世紀の中頃から19世紀の中期にかけての、ヨーロッパを中心とした激しい社会変動の中で、世界に覇を競う列強諸国に範をとり、富国強兵、中央集権の道を突き進んでいた明治新政府の“政治の中枢から離れて”いたことは、少なくともそういう意識を堅持してきたことは、本学の草創期における学風の形成にはそれなりの意義をもっていたと言えます。しかし、真に、この京都大学の学風を育み、世界の中の学問の府として今日まで成熟させたのは、この京都のもつ独特の文化的土壌であります。

8世紀の末、794年(延暦13年)に京都に都が定められてより、間もなく1200年、この都は外からの数々の文化的インパクトを受けながら、常に伝統のより深い洗練を追い求め、同時に極めて前衛的なものを育みつつ今日に至りました。都の宿命としてここは度々戦乱の巷となり、何度か焼け野原になりましたが、またその灰燼の中から新しい力が生まれました。この足下にはその栄枯盛衰を重ねた各時代の土の重層があります。しかし、各時代は、決して埋藏されることなく、各時代相の文化はその上に生きて今日にあります。この京都の重層性、多様性、これが京都の風土であり、そこには硬直化した安定よりも、常に動的な創造の力を求め、安易な調和よりも、より本質的な相克の勢いを大切にす本学独特の学風の基盤があります。

さて、京都大学の学風と言いますと、誰でも、まずそれは“自由”であると言います。そして“自由”であるということが、それぞれの個性を伸ばし、創造的な学問をする上で最も肝心なことであるという考えに共感し、同意します。“自由”ということを含い言葉にして、皆で学風を培ってきたとも言えましょう。この“自由”ということはこの大学の中の自由と、大学のあり方の自由と言うことと合わせて、少し考えてみたいと思います。

現在、世界の中の学問の府と呼ぶにふさわしい大学が共通して抱えている重大な課題が三つあるように私は思います。

その第一番は、最近、相対的に、個人の個性的な研究が軽んじられてきつつあるのではないかということにあります。個人の個性的な研究(Individual Research)というものは、大学における研究の根幹であります。特に“自由”を大事にする京都大学にとっては最も重要なことですが、今の社会の中にそういうものを相対的に軽んじる空気がないだろうか、ということにあります。

第二番目の課題は、学問分野の結合、新しい学術総合という内的な課題であります。学問の専門化、細分化、そして、深化によって各分野は驚異的とも言える知見の増大と蓄積を果たしてまいりました。

特に18世紀から20世紀にわたって、ヨーロッパそしてアメリカが、学術推進の中心的役割りを果たしてきた教育・研究体系のいわゆる専門分化の構造 (Disciplinary Specialization) の中で、今や、人間の知の本質に根ざした新しい総合 (Integration) こそが、人間の学問の新たな創造 (Creation) のための基盤であると私は認識しています。ここでは、自らの枠にとらわれない積極的な自由ということが大事な鍵となります。

第三番目の課題は、大学と社会との関係についての課題であります。今日、社会が大学に期待する内容、社会の中で大学が果たすべきとする役割が大きく変わって来ました。より高い効率を求め、安定した成長を目標とする社会の機構の中に大学を組み込んで、社会は社会の要請に対して速やかに適応する効率の良さを大学に対して期待し要請するようになってきました。これは大学の理念、本質にかかわる問題であります。大学と社会との関係において、大学の自覚する社会的使命と大学に対する社会の要請との間のギャップは広がりつつあるように見えます。このことは現代の大学の自由ということにかかわる大きな課題であります。

この三つの課題について“自由”とのかかわりをもう少し諸君と一緒に考えてみたいと思います。これらは、言うまでもなく、京都大学の将来にとって極めて深刻な課題であります。

一番目に挙げました、個人の個性的な研究が相対的に軽んじられて来てはいないだろうかということについてですが、特に20世紀の後半、一つの目標をもった研究組織を構成し、それぞれの研究者が与えられた部署で、全体を機能させるための役割を明確にして研究するという形でのプロジェクト研究が、嚇々たる成果を挙げました。しかし、それと同時に社会の中で、相対的には、個人の個性的な研究が軽んじられる風潮も生まれてまいりました。そして今、それが反省と再点検の時に来ています。

1957年にソ連の人工衛星が打ち上げられ、1969年にアメリカが人工衛星アポロで月面に人間を送り込みました。これらは、すばらしい劇的な成果であり、それは今世紀の科学技術の華として社会をあっと言わせました。しかしそのことが、二大強国が覇権を争う冷戦体制の中で、純粋な学問研究、高等教育のあり方にどれほど歪みを与えたかということも忘れてはなりません。研究の効率化、短期的評価と組織化ということが行われました。劇的な成果を挙げるためには、インディヴィデュアル・リサーチよりもプロジェクトの中でのチームワークの構成を大事にし、目標のためには、自由な発想よりも完全にその部署のノルマを果たす研究者の能力を要求するようになりました。何十年もかかって一剣を磨くタイプのインディヴィデュアル・リサーチは、全体の組織の仕組みの中で置き去りにされてきました。研究者の自由な主体性、個性という質的なものが、その研究者の有用性をはかる量的評価のかけにかくれそうになってきました。しかし、今、この状況に対する反省の時をむかえています。この間も、アメリカの大統領でさえ最近の学術研究体制の空洞化を反省して、輝かしい成果のうらでインディヴィデュアル・リサーチを犠牲にしたために取り返しのつかないことになりつつある、として、新しい方針を打ち出しています。

個性的な研究の場は大学にあります。近頃、わが国で盛んに各方面で「基礎研究」ということが唱えられていますが、多くの場合それらは短期に有用性を発揮することを期待する意がこめられており、残念ながら、ここでいう大学での自由で個性的な研究とは異質なものが多いためです。

研究の自由は、大学が今の社会の中で次の世界のために果たす使命として、強く主張すべき重要なことであります。“主体的な自由は自分の意識の中にしか存在しない”とも言われます。真の自由の最も恐るべき敵も自らの内にあります。これから、京都大学大学院で研究をする諸君、研究の自由というのは、まず自分の意識の中に積極的な自由を確立することからはじめねばなりません。そして大学は常に研究者の個性と主体性を大事にして、その自由な集合の場のあり方を求めつつけることを何よりも大

切にすべきであると考えています。

二番目の課題として、学問の総合のことを挙げました。学問の総合は、学問分野の出会いによる、単なる学際的 (interdisciplinary) 領域の形成の問題ではありません。

西田幾太郎先生 (1870~1945) の文章に次のような一節があります。“東洋文化は、教であり、西洋文化は、学である”といいますが、そのことについて述べておられます。

「歴史的進歩に伴って、学は無数に分化発展するであろう。併し何処までも中心に人と云うものがないとなければならない。ただ、学は何処までも広義において人の学であると共に、教は真実の教でなければならない。物の真実に基づいた教でなければならない。……

自然には自然の真実があり、人間には人間の真実がある。人間の真実は社会的歴史的な真実でなければならない。併し斯く云うも実在に二種あるのではない。実在は唯一の歴史的実在あるのみである。自然科学的実在もこの内に入るのである。これが私の科学観である。」

さらに、

「今日、日本文化が世界文化として考えられ、世界文化として発展するには、それが如何なる意味に於て、又、如何にしてと云うことが考えられねばならない、即ち問題とならなければならないと思う。而して、それは東洋と西洋とが一つの世界となった今日、東洋文化が如何なる意味に於て世界文化として、将来の世界歴史に貢献するかと云うことであろう。」

学の総合というのは、文化の出会いでもあります。京都大学では、この春には新しく、人間・環境学研究科という独立研究科が生まれます。京都大学は今まで各研究科にいくつかの独立専攻が既に設置されておりますが、独立研究科としては最初のものであります。これまでもすでに、文学研究科、教育学研究科、法学研究科、経済学研究科、理学研究科、医学研究科、薬学研究科、工学研究科、農学研究科、それぞれの研究科で、学の総合ということそれぞれの分野の中で、また、分野をわたって積極的に検討し、それぞれの分野の特徴に合った方法で次々に実現しております。今、ダイナミックな学の総合への力が全学で内発的に起こっております。そして、そのことは学問の本来の自然な姿でありましょう。

何ものにも邪魔されない自由、束縛されない自由。これが自由の基本であります。同時に、自らの目で観て、自ら考え、自ら行動する積極的自由が大事であります。“真の自由はそれぞれの潜在能力を十分に発揮するという事”にあると思います。今、特に大学院での教育・研究は、新しい進化成熟の時にあります。学問の自由というものの積極的な意味が真に問われる時でもあります。

三番目に大学と社会という課題を挙げました。社会の要請と大学の意識の間のギャップの問題です。一時よく産学協同とか、産官学の協調というような言葉で論議されていましたが、これは今やそのような時代のフェイズを越えた、より本質的な課題であると思っています。この課題に取り組むには、社会における大学の独特の使命の自覚ということがまず第一に大事であります。そして、そのことを社会に表現するには、大学における教育・研究の個性的な質の高さがその力になります。京都大学は、学問の府としての独自の個性を発揮することによって、社会に貢献することができるという信念と自信を我々はもっております。

大学における教育・研究の基盤は人にあることは言うまでもないことです。しかし、大学での一人ひとりがその持てる力を十二分に発揮しようとするような教育・研究の環境の現状は、誠に残念ながら、深刻な状態にあると言わねばなりません。内発的な学問の意欲が、その実現の希望を失ったとき、積極的な新しい探究への意欲は、ややもすれば守りの姿勢に転じ、妥協による延命を求めようになりがちです。社会に媚びた学問の府は、単にその学問の質を低下させて自ら埋没してしまうのみでなく、大学が社会における独自の使命を放棄することによって、社会の行く道をも誤らせることとなります。そして、そ

れは容易に取り返すことの出来ない結果を生みます。われわれは近代化の過程で、いわゆる先進諸国の中にそのような例をいくつも知っています。

大学自身のもつ積極的な自由の社会的意義ということが、ここに改めて、しっかりと考え直される必要があると思います。社会の大学への関心と期待ということそれ自体はまことに結構なことです。次の時代のために、より広い視野と、より長期的な視点に立って、これからの大学と社会との関係を真剣に論じ合いたいものです。京都大学は、大学の持つ使命を自覚して、それに基づいた積極的な大学の自由を、学問の自由を、この新しいフェイズにある社会の中で改めて強調し、社会に表現すべき時であると考えています。そしてそのことが、社会に、行政的に確に理解され実効を挙げるためには、大学の中に自由な学風が常に高い質で維持されていることが基本的に大事なことであり、それがあって初めて可能なことであります。これは、皆で守るべき大学の自由であります。

京都大学大学院への入学者諸君、これから共に自由の伝統を継承し発展させる諸君に、この入学式に当たって、大学の積極的な自由という課題について語りました。この学問の府の自由の学風を、より高い質とより充実した内容にすることに共に努力しようではありませんか。大学の自由とは、決して社会からの孤立した囲いの中の自由であってはなりません。社会に対して大学はしっかりと信ずるところを言うべきです。その裏づけとなる力は、言うまでもなく、大学内で、一人ひとりが自由を、積極的な学問の自由を学術研究の質として表わすことです。それこそが学問の府の力であります。それが大学の社会への貢献であり、社会の将来への大学の使命であります。開かれた大学の真の姿がそこにあると信じます。諸君の真摯な研究と充実した人生を心から期待します。

〈大学の動き〉

総合技術部の設置

平成3年4月1日、全学的な教育・研究支援機構として全学の教室系技術職員を統合する総合技術部が設置された。

同部は、教室系技術職員問題について検討を重ねていた技術職員問題検討会の報告（『京大広報』No.406参照）を受けて設置されたものである。

同部は、教育・研究にかかわる専門技術の高度化、専門化に対応するため、全学の教室系技術職員を配置する部局の技術部を総括し、技術職員相互の技術交流及び技術の向上を図るべく、研修等の企画及び実施に取組み、また教室系技術職員による自発的な研鑽活動を奨励することにより、組織としての活性化を推進することを目的としている。

初代総合技術部長には中川博次工学部長が就任した。

なお、同部の事務は、当分の間、庶務部人事課が行う。



総合技術部の看板を掲げる
西島総長と中川総合技術部長

部局長の交替等

防災研究所長

土屋義人防災研究所長の任期満了に伴い、その後任として村本嘉雄防災研究所教授（河川災害研究部門担当）が任命された。任期は平成5年4月30日までである。

授業料の納付方法について

本学では、これまで授業料は、事務局（経理部経理課収入掛）の窓口での現金納付方式を採っていたが、平成3年度後期分授業料からは、次のように銀行等を利用した納付方法に改めることとした。

対象

対象は大学院学生、学部学生、医療技術短期大学部学生（研究生・聴講生・研修員は除く。）

納付方法

1. 納入告知書（銀行等へ払い込むための用紙）を保証人住所・保証人方、学生あてに郵送する。
2. 納入告知書に現金を添えて※銀行又は信用金庫に納付すること。
※郵便局、農業協同組合、漁業協同組合、信用組合、労働金庫、外国銀行では取り扱っていない。

不明の点があれば、経理部経理課収入掛（内線2141）まで照会されたい。

（経理部）



〈荣誉〉

柳田聖山名誉教授、山田秀明
農学部教授が紫綬褒章を受章

柳田聖山名誉教授（元人文科学研究所教授，中国禅宗史），山田秀明農学部教授（応用微生物学）に、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、平成3年4月29日紫綬褒章が授与された。

日誌

（1991年4月1日～4月30日）

- | | |
|---------|--|
| 4月3日 | 大韓民国 中央大学校 河 環根 学長夫妻他
1名来学，総長と懇談 |
| 5日 | 名誉教授称号授与式 |
| 〃 | 退官教授懇談会 |
| 〃 | 連合王国 Oxford 大学 W. Knapp 教授来学，
総長と懇談 |
| 8日 | 医療技術短期大学部入学式 |
| 〃 | 医療技術短期大学部名誉教授称号授与式 |
| 11日 | 学部入学式 |
| 〃 | 大学院入学式 |
| 12日 | カナダ Calgary 大学 Peter J. Krueger 元副
学長来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 〃 | 在日イタリア大使館 U. Ratti 科学技術 参事
官来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 15日 | スウェーデン王国 Royal Swedish Academy
Solgerd Bjorn-Rasmussen 広報部長夫妻来
学，総長及び関係教官と懇談 |
| 16日 | 評議会 |
| 17日 | 国際交流委員会 |
| 〃 | 国際交流会館委員会 |
| 〃 | アメリカ合衆国 California 大学 San
Francisco 校 Julius R. Krevans 学長他 3
名来学，総長と懇談 |
| 18日 | ドイツ連邦共和国 Bonn 大学
K. Fleischhauer 学長他 4 名来学，総長及
び関係教官と懇談 |
| 19日 | 同和問題委員会 |
| 22日 | 環境保全委員会 |
| 23日～26日 | 新採用職員研修 |
| 25日 | 防火委員会 |
| 30日 | 評議会 |
| 〃 | 大学院審議会 |

＜紹介＞

放射性同位元素総合センター

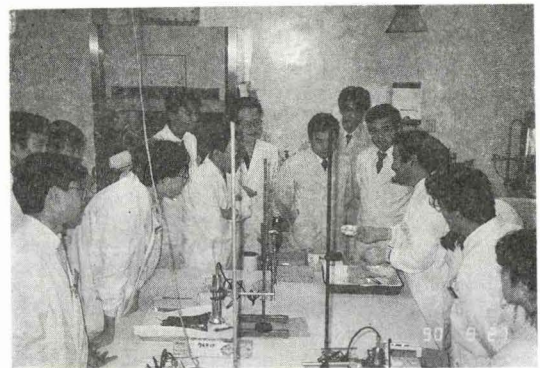
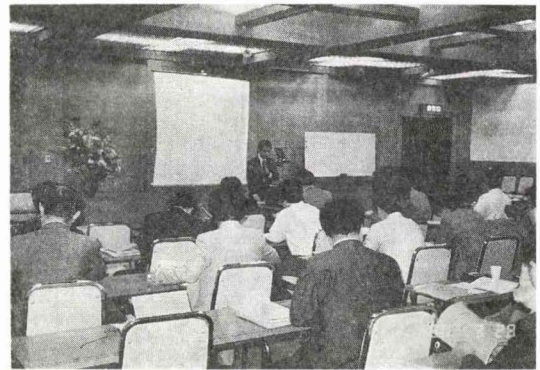
本センターは放射性同位元素を利用したの研究・教育の中心となる施設であり、学内各部門からの共同利用研究を受け入れる他、毎年放射性同位元素等取扱者の教育訓練を行っており、理系の方々にはおなじみのことと思う。もちろんこれらが本センターの最重要課題であることはまちがいないが、教育訓練については前回（本広報No.342）詳しく紹介したので、今回は一般にあまり知られていない本センターの一面を紹介したい。

全国に放射性同位元素総合センター（アイソトープ総合センターと称している大学が多い。以下「センター」）が国立10大学に設けられている。一口に放射性同位元素の利用といっても、企業と大学では管理のあり方も相当異なった点があり、10大学のセンターは横の連絡を取りあって、大学特有の問題を中心に取りこんできている。共同研究や情報の交換をしたり、法令の改正に際してはそれをいかに各大学の放射線障害予防規定に織り込むかを論じたり、最近では合同で各大学の得意とする分野を分担して、バイオサイエンス研究における内部被曝の防止を研究したりしてきた。

このような10大学のセンターの一つの事業として、年1回「放射線安全管理者及び放射線管理実務担当者のための研修」を行っている。10大学などと違い、センターを持たない大学にあっては管理室も小規模のことが多く、最新の法令改正への対応、安全利用のためのノウハウ等情報が十分でないことが多い。このような状況を少しでも改善するため、年1回10大学のセンターのスタッフが講師となって、2日間にわたって講義・実習を行うものである。10大学持ち回りというたてまえながら、スタッフ数が不十分のセンターもあり、本センターは、昭和61年（1986）に続いて、平成2年（1990）9月にも主催することとなった。

実習のテーマには、以前から本センターで研究している ^{35}S と ^{14}C の分別測定と、ラット中の ^{125}I の挙動を選んだ。今回は ^{125}I 使用者にとって関心の深い後者を紹介させて頂く。生物学、医学の分野で ^{125}I は非常に頻用されるが、 ^{125}I は揮散しや

すく、甲状腺に集積し内部被曝を起こしやすいことは、チェルノブイリ事故（この場合は ^{123}I だが）に関連して新聞等にも載ったのでご存知の方も多いと思う。本実習では ^{125}I の体内汚染が起こった時、可及的速やかに無機ヨウ素（ヨウ化ナトリウム）を大量に与えて、内部被曝を軽減し甲状腺障害を防止することをテーマとした。多人数で行う関係であまり大きな動物は使えずラットと決まったのだが、実際予備実験をやってみると予想程のきれいな結果にならなかった。実際には無機ヨウ素投与によって甲状腺の ^{125}I のとりこみは激減しており、無機ヨウ素非投与との差が歴然としており、実験は成功なのだが、 ^{125}I 用検出器で調べたのではこれがラットには大きすぎて、甲状腺以外（血液、筋肉）からのX線、 γ 線もひろってしまったのだった。結局摘出甲状腺のデータをも呈示して何とか納得の行く実験結果とした。忙しかったものの振り返ってみると、試行錯誤しての準備はそれなりに面白く、受講生・講師そろっての親睦会のビールもうまかった。受講生の評判もまざまざ



「放射線安全管理者及び放射線管理実務担当者のための研修」の講義風景（上）と実習風景（下）

で、スタッフ一同ほっとした。

今回研修会を主催して、準備も大変であったが、応募者から受講者を決定するまでの人選もなかなかつらいものがあった。旅費予算の枠がきついこと、また本センターの通常の研究施設を流用して実習を行うことなどの関係で40人が限度で、実際には何倍もの応募があったのに残念であった。旅費予算がもっとあれば、そして教育訓練のための実験室などの施設があれば、とつらい思いであった。

10大学以外の大学での放射性同位元素の利用も当然盛んであり、管理担当者もなかなか大変である。これらセンターを持たない大学に対して、情報を提供し、相談に応じていくのも本センターに期待されている業務の一つであり、今後ますます重要度が増していくものと思われる。

(放射性同位元素総合センター)

計 報

木村 常信 名誉教授

本学名誉教授 木村常信 先生は、4月24日逝去された。享年89。

先生は、大正15年京都帝国大学法学部を卒業、引き続き同大学大学院で研究の後、朝鮮総督府京城法学専門学校教員、同専門学校教授、徳島県勝浦郡横瀬中学校長、大分経済専門学校教授、大分大学教授を経て、昭和25年3月京都大学分校(教養部)教授に就任、同40年4月鹿児島大学法文学部教授に配置換え、同42年3月停年により退職された。その後、昭和42年4月から同53年3月まで京都産業大学教授を務められた。この間、昭和40年4月には京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生の専門は、民法で、契約法や代理理論をはじめとする多くの難問に積極的に取り組まれた。

主な著書として、『新民事責任論』、『民法異説の研究』などがある。また、民法に限らず、広く公法及び法哲学の領域の研究にも力を注がれ、この方面でも多くの業績を残されている。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和46年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(教養部)

高木 公三郎 名誉教授

本学名誉教授 高木公三郎 先生は、5月7日逝去された。享年83。

先生は、昭和11年京都帝国大学理学部を卒業後、南京紫金山天文台長等を経て、昭和24年10月本学分校(教養部)講師、助教授、同37年3月教授に就任、同46年4月停年により退官され、同49年6月本学名誉教授の称号を授与された。

この間、昭和45年4月から46年3月まで本学評議員として、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、昭和56年3月まで龍谷大学教授を務められた。

先生の専門は、身体運動学、運動生理学で、なかでも身体運動を解剖学的・力学的に解析する研究において、数多くの優れた研究業績を残された。また、運動解析に筋電図の手法を導入する点において、先駆的役割を果たされた。

主な著書に『身体運動学』、『運動生理学』等がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和53年には勲三等瑞宝章、同58年には京都府スポーツ特別栄誉章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(教養部)



〈資料〉

平成3年度入学試験諸統計

1. 募集人員, 志願者数, 合格者数, 入学者数, 合格者最高点・最低点(総点)等調

学部・日程	募集人員	志願者数	第1段階 選抜 合格者数	受験者数	合格者数	入学者数	満点	総点			
								最高点	最低点		
文学部	前期	205	666	663	657	208	242	700	534.5	436.16	
	後期	35	412	256	112	36		700	532.75	481	
教育学部	前期	50	185	185	181	55	75	900	709.07	586.58	
	後期	20	230	157	97	21		1,000	711.41	633	
法学部	前期	350	1,110	1,109	1,092	357	398	750	555.25	445.75	
	後期	60	776	509	185	45		17	500	417.25	386.75
経済学部	前期一般	170	548	548	535	175	271		800	634.5	515.5
	前期論文	60	323	273	265	61		1,050	720.75	558.5	
	後期	40	496	291	93	38		5	950	635.35	479.8
		42	20	14	6						
理学部	前期	294	1,261	1,213	1,205	296	326	650	557	386	
	後期	32	1,556	1,501	1,104	32		400	309	251	
医学部	前期	90	416	377	363	92	102	1,250	1,110.5	927	
	後期	10	307	210	114	10		1,250	983.75	926	
薬学部	前期	60	180	180	175	68	87	950	770.41	632.25	
	後期	20	240	240	144	23		950	668.78	582.08	
工学部	前期	641	2,189	2,105	2,079	641	1,062	1,000	869.58	605.75	
	後期	419	3,150	2,933	1,781	428		1,000	779	583.75	
農学部	前期	260	733	732	719	272	338	1,050	957.16	625	
	後期	65	785	651	368	71		810	590.66	480.13	
小計	前期	2,180	7,611	7,385	7,271	2,225					
	後期	701	8,066	6,808	4,043	730					
合計	2,881	15,677	14,193	11,314	2,955	2,923					

(備考) 1) 法学部, 経済学部後期の下段は, 外国学校出身者のための入学者選考を示す。

2) 合格者数には追加合格者を含む。

3) 合格者最高点・最低点(総点)は, 前期(3月9日), 後期(3月22日)の合格発表時のもので, 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。

<工学部・農学部学科別内訳>

学部・日程・学科	募集人員	志願者数	第1段階 選抜 合格者数	受験者数	合格者数	入学者数	満 点	総 点		
								最高点	最低点	
工 学 部	前期	641	2,189	2,105	2,079	641	1,062	1,000	869.58	605.75
	後期	419	3,150	2,933	1,781	428			779	583.75
土木系学科	前	75	256	256		75	127	1,000	798	667.66
	後	50	368	350		53			745.75	635.66
機械系学科	前	52	214	182		52	87	1,000	819.25	686.5
	後	35	325	307		35			742.33	643.58
電気系学科	前	86	252	252		86	140	1,000	838.25	681
	後	54	392	371		54			779	651
金属系学科	前	50	167	166		50	80	1,000	755.33	638.58
	後	30	204	191		30			719.08	613.58
建築系学科	前	55	198	193		55	94	1,000	825.33	667.25
	後	40	328	302		41			766.75	651.33
工業化学科	前	35	102	102		35	54	1,000	831.66	647.08
	後	20	114	105		20			712.91	609.08
石油化学科	前	35	135	123		35	56	1,000	699.25	605.75
	後	20	159	137		21			671.66	597.58
化学工学科	前	32	112	111		32	54	1,000	803.41	659
	後	22	157	154		22			663.75	624
高分子化学科	前	27	98	95		27	46	1,000	769.25	634.75
	後	18	115	105		19			696.33	609.08
合成化学科	前	27	67	67		27	44	1,000	773.91	634
	後	18	92	82		19			700.83	583.75
資源工学科	前	25	105	88		25	41	1,000	747.33	638.58
	後	15	108	103		17			726.33	622.5
航空工学科	前	15	56	53		15	25	1,000	780.25	670.41
	後	10	152	129		10			754.33	665.91
原子核工学科	前	15	47	47		15	25	1,000	816.5	656
	後	10	77	69		10			709.58	651
衛生工学科	前	25	94	88		25	45	1,000	809	683.66
	後	20	113	101		20			729	616.33
数理工学科	前	27	99	95		27	45	1,000	840.75	687.5
	後	18	138	133		18			753.75	673.5
精密工学科	前	26	84	84		26	43	1,000	765.25	653.33
	後	17	154	145		17			705.83	633.08
情報工学科	前	34	103	103		34	56	1,000	869.58	724.91
	後	22	154	149		22			770.66	681.5
農 学 部	前期	260	733	732		272		1,050	957.16	625
	後期	65	785	651		71			810	590.66
農 学 科	20	(前期 16名 後期 4名)			22					
林 学 科	20	(前期 16名 後期 4名)			21					
農芸化学科	74	(前期 60名 後期 14名)			74					
農林生物学科	15	(前期 12名 後期 3名)			16					
農業工学科	41	(前期 33名 後期 8名)			45					
農林経済学科	35	(前期 28名 後期 7名)			37					
水産学科	23	(前期 18名 後期 5名)			24					
林産工学科	34	(前期 27名 後期 7名)			34					
食品工学科	38	(前期 30名 後期 8名)			38					
畜産学科	25	(前期 20名 後期 5名)			27					

2. 志願者・入学者 出身高校所在都道府県別調

上段……………志願者数
下段……………入学者数

都道府県	学部										計	都道府県	学部										計
	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計			文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計	
北海道	11	11	15	7	55	3	8	53	8	171		三重	19	2	24	18	42	5	7	66	5	188	
	3	4	6	2	10	1	1	13	2	42			7		4	3	7	2	1	14	2	40	
青森	3		5	4	14	4		10		5	近畿	滋賀	19	4	34	27	47	8	12	94	51	296	
			2		1			2		40				4	1	7	6	5		3	20	9	55
岩手	4		2	3	10	2	1	4	2	28		京都	98	40	205	172	161	89	53	590	214	1622	
	1		1		4			1		7			21	6	47	37	33	16	7	130	47	344	
宮城	3	2	4	2	12		1	21	9	54		大阪	164	78	371	245	411	124	86	1130	345	2954	
	2	1		1	1		1	4	1	11			40	14	82	57	47	15	12	239	72	578	
秋田			3	1	10			12	1	27		兵庫	82	45	196	142	180	120	53	552	144	1514	
			1					1		2			17	10	46	32	23	22	10	143	41	344	
山形	7		2		5	2		9	2	27	畿内	奈良	46	15	119	85	86	40	17	293	74	775	
	2		1					1	2	6				13	4	32	18	15	9	4	82	15	192
福島	3		4		20	8	1	6	2	44		和歌山	16	2	10	8	28	7	1	57	15	144	
	1		1		1	1				3			4			2	4	1		12	2	25	
茨城	7	5	18	7	43	2	1	24	13	120	中国	鳥取	5	1	9	2	9	1		16	10	53	
		1	3		7			2	4	17				2		3		1		6	3	15	
栃木	3	2	10	3	24	2	6	14	4	68		島根	12	5	21	14	11	5		26	15	109	
			1		5		1	3	2	12			6	2	10	4	2		6	5	35		
群馬	8	12	10	11	24	4	2	34	5	110		岡山	22	3	37	26	31	6	8	98	27	258	
		1	4	2	1		1	7		16			7	1	7	5	1	1	3	18	5	48	
埼玉	23	6	21	31	78	5	8	90	24	286	四国	広島	29	9	36	28	54	27	13	152	22	370	
	2			3	7		2	6	3	23				8	3	5	6	3	6	4	36	7	78
千葉	25	14	26	23	137	12	7	126	35	405		山口	11	5	17	5	37	2	5	58	6	146	
	1	1	5	4	11	1	1	7	9	40			2	1	4	1	6		2	13	2	31	
東京	112	37	151	135	341	56	32	334	105	1303	四国	徳島	3	4	18	6	11	3		23	4	72	
	19	3	19	24	32	3	6	28	13	147				1	1	5				7	1	15	
神奈川	37	14	57	53	199	15	19	214	76	684		香川	10	2	38	25	24	9		47	9	164	
	10	1	6	9	15	2	3	31	13	90			2		6	5	3	1		7	3	27	
新潟	6	1	9	3	31	2	1	28	2	83	九国	愛媛	13	8	13	15	19	10	5	70	16	169	
	1		1		4	1		6		13				7	4	4	2	4	1	3	13	7	45
富山	6	7	14	10	20	1	3	50	18	129		高知	10		3	3	11		5	17	7	56	
	1	1	4	1	3		1	9	5	25			2			1	1		2	4	2	12	
石川	16	1	14	10	21	7	3	48	16	136	九州	福岡	28	14	55	36	105	16	3	156	27	440	
	6		2	2	4	3		12	4	33				11	4	11	8	6	2	1	21	5	69
福井	12	7	29	14	15	8	1	36	8	130		佐賀	2	3	6	6	16			19	3	55	
	4	2	11	3	3	1	1	8	2	35			1	1	1		3			4	1	11	
山梨	5		5	7	22		1	12	8	60		長崎	6		5	6	18	8	1	32	10	86	
			1		2			3	2	8			1		1	1	4	1		3	5	16	
長野	18	3	16	5	42	2	7	32	11	136		熊本	8	1	19	10	22	1	1	32	7	101	
	1			1	7		3	3	4	19			2		6	1	2		4	1	16		
岐阜	25	2	36	11	22	10	9	65	12	192		大分	5	1	7	6	22	2	1	10	4	58	
	4	1	11	1	2		4	13	2	38				1	4	1	4			1	1	12	
静岡	18	8	28	26	80	14	7	99	34	314		宮崎	4		9	7	14		2	16	2	54	
	4	2	4	7	7		1	22	7	54			2		5	1	3		4		15		
愛知	84	23	120	75	162	43	19	377	70	973	九州	鹿児島	18	9	20	17	29	28	6	65	20	212	
	17	3	21	13	20	8	8	76	21	187				2	1	3	4	2	4	1	15	6	38
												沖縄			1	1	6	2		1		11	
															1	1						2	
												検定	11	9	14	15	31	8	4	17	16	125	
													1			2			2		5		
												その他	1		72	43	5			4		125	
															17	5					22		
												合計	1078	415	1958	1409	2817	723	420	5339	1518	15677	
													242	75	415	276	326	102	87	1062	338	2923	

(備考) 1) 外国学校出身者のための選考を含む。
 法学部……志願者 72名, 入学者 17名
 経済学部……志願者 42名, 入学者 5名
 2) 高等専門学校出身者は, 高等専門学校の
 所在都道府県を含む。

3. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

検…入学資格検定合格者、専…高等専門学校出身者、他…高校、高専、検定以外の者

学部	志 願 者						入 学 者					
	総 数	現 役 3.3卒	浪 人		人		総 数	現 役 3.3卒	浪 人		人	
			2.3卒	元.3卒	63.3卒	62.3以前			2.3卒	元.3卒	63.3卒	62.3以前
文学部	1,078 女 322 女 11 女 1 他 1	588 女 206 女 3 他 1	363 女 100 女 4 女 1 他 1	84 女 12 女 1	14 女 1 女 2	29 女 3 女 1	242 女 90 女 1	139 女 63 女 1	81 女 25	17 女 2	1 女 1	4 女 4
	54.5	45.5					57.4	42.6				
教育学部	415 女 137 女 9	197 女 73	134 女 51 女 4	51 女 8 女 4	11 女 4	22 女 5 女 1	75 女 38	47 女 23	23 女 13	4 女 1		1 女 1
	47.5	52.5					62.7	37.3				
法学部	1,958 女 247 女 14 女 1 他 72	1,128 女 152 女 3 他 69	610 女 74 女 5 他 3	143 女 15 女 2 女 1 他 1	38 女 4 女 2	39 女 2 女 2	415 女 56 他 17	239 女 39 他 16	148 女 16 他 1	24 女 1	4 女 1	
	57.6	42.4					57.6	42.4				
経済学部	1,409 女 108 女 15 他 43	677 女 75 女 8 他 41	519 女 22 女 5 他 2	135 女 7 女 1	32 女 2 女 1	46 女 2	276 女 18 女 2 他 5	125 女 12 他 5	117 女 5 女 1 他 1	25 女 1 女 1	5 女 1	4 女 4
	48.0	52.0					45.3	54.7				
理学部	2,817 女 219 女 31 他 5	1,551 女 129 女 12 他 5	791 女 50 女 14	227 女 19 女 1	100 女 6 女 1	148 女 15 女 3	326 女 21	170 女 12	135 女 9	16 女 1	4 女 1	1 女 1
	55.1	44.9					52.1	47.9				
医学部	723 女 88 女 8 女 5 他 5	279 女 34 女 2	141 女 21	73 女 9	38 女 4 女 1	192 女 20 女 5 女 5 他 5	102 女 7	61 女 6	32 女 1	4 女 1	3 女 1	2 女 2
	38.6	61.4					59.8	40.2				
薬学部	420 女 134 女 4	226 女 84	122 女 37 女 1	32 女 2 女 1	8 女 2	32 女 9 女 2	87 女 28	48 女 18	34 女 9	4 女 1		1 女 1
	53.8	46.2					55.2	44.8				
工学部	5,339 女 187 女 17 他 4	3,072 女 111 女 3	1,775 女 50 女 9	305 女 15 他 2	91 女 5	96 女 6 女 5 他 2	1,062 女 31 女 2	597 女 19	412 女 8 女 2	44 女 3	6 女 1	3 女 1
	57.5	42.5					56.2	43.8				
農学部	1,518 女 284 女 16	688 女 158 女 8	555 女 93 女 6	163 女 18 女 1	48 女 9	64 女 6 女 1	338 女 75	147 女 39	162 女 33	22 女 2	4 女 1	3 女 3
	45.3	54.7					43.5	56.5				
合 計	15,677 女 1,726 女 125 女 7 他 125	8,406 女 1,022 女 39 他 116	5,010 女 498 女 48 女 1 他 5	1,213 女 105 女 11 女 1 他 2	380 女 33 女 7	668 女 68 女 20 女 5 他 2	2,923 女 364 女 5 他 22	1,573 女 231 女 1 他 21	1,144 女 119 女 3 他 1	160 女 10 女 1	27 女 1	19 女 3
	53.6	46.4					53.8	46.2				

(備考) 外国学校出身者のための選考を含む。 法学部……志願者 72名, 入学者 17名
経済学部…… 〃 42名, 〃 5名

